

参加して下さった方の感想から

どうしてこの本が出たか、この本に込められた思いを知ることができました。知る事の大切さを実感しました。知らない事はいけない事です！知ることからスタートして自分にできる事をもっと考えてみようと思いました。

途中まで、一体私に何が出来るだろう。小さな子どもがいて、今すぐ動くことはできない?!と思って暗く考え込みながら聞いていたのですが、少しずつヒントになるお話が聞けて良かったと思いました。

問題を解決したいときは直接行動をおこすよりも、周りから解決していく方法で、気にしている問題を解決していけると、今日のお話で気がつきました。

本のタイトルは知っていましたが、内容は知りませんでした。ニュースで知っていた事以外の事を知りました。

人は目の前にある問題、自分の事に必死で世界の現状は聞き流してしまいがちです。性別、人種、言語からおこる差別、貧困について考える時間をもらえました。私には何が出来るのでしょうか？まずはジェンダーについて学びたいと思いました。

今まで自分が関わった人すべてに感謝したくなりました。子どもを持つ親として、これからの未来をすてきな状態で残してあげるため何かを始めなければと思いました。何が出来るかはこれから考えなければなりません。

講演を聞いて世界の恵まれない人の事を改めて知る事ができました。今の自分のおかれている現状は恵まれており、食事も満腹になるまで食べられ、TVを見ながらダラダラと過ごしている事を考えるとありがたみを当り前とと思っている自分を恥ずかしく感じました。世の中には食べられない人もいます事を考えて食品の無駄使いをなくし、感謝しながら生きていこうと思いました



INFORMATION エセナおおた 第28号

平成21年3月15日

発行: 大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」

子育てサポーター養成セミナー

あなたの子育て経験がキャリアに変わる!



エセナおおたでは、次世代育成支援事業として、ジェンダーの視点を取り入れた「子育てサポーター養成セミナー」を行なっています。2008年度は1月13日から2月16日まで、子育て中の人、子育て経験を生かしたい人を対象に連続講座を開催しました。

子育て支援の目的は、「子どもがちゃんと育つこと」です。今、親になる世代は赤ちゃんに触れたことが少ない上に、情報過多な時代に生きているため、皮膚感覚で赤ちゃんに接することができない人が多くなっています。そんな若い世代への子育て支援は、「親自身が持っている子育ての力を向上させること」にあります。

初回の「子育て支援は、こんなに楽しい!」では、母親の置かれている社会状況と子どもの現状を通して、子育て支援がなぜ必要なのかを学びました。子育てに関わる大人は子どもたちからエネルギーをもらい、考える力をもらっています。子どもを育てる責任は、母親だけでなく父親にも周りの大人にもあります。

2回目の「育児書にとられない子育て～子育てにジェンダーの視点を」では、子どもは家庭の中だけではなく、社会の中で育つことの理解を深めました。ひとりで子育てを抱え込み、助けを求めることに罪悪感を感じる親もいます。3歳までは母親が育児に専念するべきという3歳児神話が根強くありますが、むしろ、母親と子どもの密着が弊害を生むこと、誰が育児をするかではなく、親密な関係による関わりが人としての基本的な信頼関係を築くこと、価値観の異なる人の考えを認め、受容することが大事であることを学びました。

3回目の「子育て支援に必要な対人コミュニケーション力」

で取り上げたのは、相手の気持ちや権利を大切にしながら、自分の気持ちや考え、要求などを表現する相互尊重型のコミュニケーション技法です。自分も相手も大切にしたい表現方法を理解し活用すれば、人との関係がよくなります。お互いの関係がうまくいくのもいかないうちにも双方に半分ずつの責任があります。相手が受け容れやすく、理解しやすい表現方法を工夫したり、自分の受取方を変えてみるのが大事です。



4回目は「子どもが泣くのは“自己主張”」です。泣いている子どもに接する時は子どもの気持ちになって考えることが大切です。子どもを泣き止ませようとするのではなく、泣き止むことも子ども自身が選び取っていくことを学びました。実際に手遊びをしたり、折り紙を折ってみて、子どもと遊ぶ楽しみを実感しました。

5回目は「今、赤ちゃんや幼児期の脳がおもしろい!」でした。赤ちゃんはお母さん

のお腹の中にいるときから学習しています。誕生までの赤ちゃんの育ちと脳の発達を知り、どういう支援ができるかを考えました。赤ちゃんは生まれながらに育つ力をもっています。子育て支援は子どもの育つ力のお手伝い、生きるための力を助けるためにあります。

6回目の「育児力を身につける!～みんながって、みんないい」は総集編です。子育てサポーターとして何をやるのか、大切なことは何かをワークシートで振り返りました。

次世代を担う重要な存在の子どもたち。50年後を見据えて、子育てに関わることを学んだ講座でした。「子育て支援は単なる保育だと思っていたが、ジェンダーや子育て支援の基本的なことを知って、自分自身のあり方や夫との関係が大事なことがわかった。今後に生かしたい」という声が届いています。

●行列のできる講座とチラシの作り方～人が集まる企画と広報を丸ごと伝授!～

基礎から企画と広報を学びたい方、行列のできる講座の作り方を学びたい方に最適です。人が集まる企画の立て方、魅力的なタイトルのつけ方、集まりやすい開催日時、チラシのレイアウト等、グループで話し合いながら、実際に講座を企画する、実践を交えた講座です。パソコンは使いません。

日程	木曜日 10:00～12:00
4/16	人が集まる企画はこう作る! ポイントとコツを伝授!
4/23	グループに分かれて企画会議!
5/7	参加者ターゲットの絞込み
5/14	ココロに響く、ゴールの見えるタイトルを決める!
5/21	グループメンバー全員で魅力的なチラシを完成

講師: 牟田静香 (NPO 法人男女共同参画おおた)
募集: 30名 (申込多数の場合は抽選)
参加費: 無料
保育あり: 1歳～未就学児 (1人1回500円 要事前予約)
申込: Eメール、FAXで 4月10日(金)必着

●防災セミナー 女性の視点をいかして「災害に強いまち」をつくる! 2009年3月24日(火) 13:00～16:00

災害に備えた計画を参加者の方々と考えます。
講師: 福田信章さん (NPO 法人東京災害ボランティアネットワーク)
募集: 30名 (申込先着順)
参加費: 無料
申込: FAX か Eメールで。



「INFORMATION エセナおおた」の発行は NPO 法人男女共同参画おおたが区の補助を受けて実施しています。

第2弾!!

●いつか来る おひとりさまの老後を乗り切る知恵と工夫

結婚していても、していなくても最後は1人になったら「おひとりさま」。1人の老後だって、考えようによってはステキなものになるはず。明るく安心して老後を乗り切る知恵と工夫を学びます。

日程	毎週木曜日 14:00～16:00
4/23	「最期まで自分らしく」生きる工夫: 井上治代さん
4/30	問題解決のコミュニケーション術: 野澤聡子さん
5/7	心伸びやかにわたしを見つける: 高村花美さん
5/14	こころ美人の作り方と免疫力アップ術: 鶴貝真由美さん

対象: 50歳以上の女性
定員: 35名 (申込多数の場合は抽選)
参加費: 無料
申込: 往復はがき 4月7日(火)必着



エセナフォーラム2009 2009年7月18日(土)・19日(日) 参加団体募集中!

大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」
〒143-0016 東京都大田区大森北4-16-4
電話 03-3766-6587 03-3766-4586
FAX 03-5764-0604
e-mail esenaota@yahoo.co.jp
HP URL http://www.escenaota.jp/
メルマガ escenaotamail@yahoo.co.jp
指定管理者 特定非営利活動法人男女共同参画おおた



5人に
ひとりが
飢え

「世界がもし100人の村だったら」

7人に
ひとりが
文字が
読めない

著者が語る驚きの真実

2008年12月11日に行なわれた講演会「世界がもし100人の村だったら」は、世界の現状に目を見開かされ、池田香代子さんのチャーミングな人柄にも魅了された2時間でした。



私たちは無力ではない、微力なのだ
「9・11」の大惨事があって、アメリカがアフガニスタンを報復攻撃すると言い出した時に、「世界がもし100人の村だったら」の構想が生まれました。

世界がどうなってしまう。何かしなければ、居ても立ってもいられなくて、たまたま横浜で開かれた中村哲先生の講演会に行きました。中村先生は、20年ぐらゐアフガニスタンで医療奉仕をなさっています。病気を診ているうちに、病気の6~7割はきれいな水さえ飲めれば、元々罹らない病気だということに気がついて井戸を1500本も掘り、農業用の灌漑用水を何10キロと作っておられます。

その中村先生がアフガニスタンに対する緊急募金を呼びかけられました。「募金なら私にも出来る」と思いました。

当時、「9・11」後の人の心をつかむメールが流行っていました。それを思い出して、「そうだ、あのメールを書き直して、本にして、その印税を中村先生に使っていただこう」と、思いました。100万円を目標にしました。

この本は今、140何万部出ています。印税は100万円どころではなくなりました。頭を冷やして考えました。

「今はアフガニスタンが注目を集めているけれど、大変なのはアフガニスタンだけじゃないはずだ。そういう所に行って素晴らしい事をしているのは中村哲さんだけじゃないはず」と思いました。印税から税金を払った残りで「100人村基金」を作り、中村先生には最初考えた100万円だけを受け入れていただきました。

「私たちは無力ではない、微力なのだ」ということを、ホントに思い知らされた出来事でした。



日本の評価を高めている NGO の若者たち
日本にも難民の方々が逃げて来ています。日本政府は、「帰っても命に別状ない」と強制送還します。ところが、帰った自分の国の空港で逮捕され、拷問を受けた人、元住んでいた所に住めなくて、転々と身を隠している人が居ます。殺された人も居ます

2008年、日本で難民として認められたのは57人です。他の先進国に比べると、桁が2つから3つ違います。日本は難民として逃げてきた人たちを難民条約に違反して強制収容しています。弁護士さんがボランティアで分厚い書類を揃えるのに奔走していますが、1人25万円から200万円の保証金がないと、収容所から出してもらえない。「100人村基金」で保証金などの立替えをしています。

ある時、いつも一番聞きたいけれど、聞いてはいけない質問がポロッと出てしまいました。「どうして日本に逃げて来たの？」って。

みなさん、口を揃えて言ったのは2つのことでした。1つは、日本のNGOは支援の時に分け隔てをしない。現地での支援は、その実力者と話をつけるとスムーズにいくため、多数派の部族長と話をつけます。すると、弱小な部族は放っておけという話になります。

ところが、日本のNGOは、「私たちはこの地域を担当しますから、そんなの関係ありません」と言って踏ん張る。これはもの凄く大変な事です。

もう1つは、欧米のNGOは危険が迫ると、すぐに撤収する。日本人は華奢でひ弱そうに見えるけれど、一番最後まで踏みとどまってくれる。公正で勇敢な日本人、逃げて行くなあの人たちの国だと思って逃げて来た。「そしたら、政府は違った」って言われてしまいました。

現地に出ているNGOの人の6~7割が、幼な顔を残した若者です。私たちの知らない内に知らない所でたくさんの若者たちが、あの「公正で勇敢な」というように、私たちの評判を上げてくれています。



貧困から抜け出す鍵は女性への教育
この分野の勉強をして考えさせられたのは、世界規模の貧富の差です。特に食べ物。食べ物が無かったら、どんなに辛いだろうと思いました。今、この瞬間にも6億5千万人が、ろくな食べ物が無い。こんな世界はおかしい、何とかならないのかと

調べてわかったことが2つあります。
途上国の女の子に小学校に行ってもらえば良いのです。
2006年、バングラデシュの経済学者ユヌス博士と博士が作ったグラミン銀行がノーベル平和賞を受けました。
博士はマイクロクレジット、マイクロファイナンスともいう、貧しい人々に担保を取らずにお金を貸す仕組みを考えました。そ



のお金で、スラムの女性がミシンを1台買って内職を始め、貧しい小作の人が春に蒔く種籾を買うことができます。

グラミン銀行は5人1組に貸します。そうすれば誰かが病気になって倒れても助けあうことができます。銀行を出発した最初は男女同数に貸し出すことを原則にしました。ところが、女性の方が運用成績が良い。今や借り手の93%が女性だそうです。

この資金を借りるには、申込書と返済計画書を自分たちで書いて出さなければいけない。また、簡単な帳簿が付けられなきゃいけない。つまり女性が基礎的な読み書き計算ができることが貧しさから抜け出る大きな鍵になります。

女の子たちは学校へ行って、文字が読めるようになると、自分に自信をつけ、自分の考えをはっきり言うようになります。12~3歳で結婚するのは嫌。毎年、毎年10何人も子どもを産むのは嫌と。結婚は大人になってから、子どもは1年置きに3~4人にするだけで、貧困から抜け出ることができます。

もう1つは、出産と関係があります。「女子供」という言い方があります。「女子供」という言い方には、民俗学の立場からすると、道理があります。昔は子どもがよく死にました。女性もお産で死にました。戦後の日本でも48人に1人の母親がお産で命を落としました。現在も途上国のネパールでは32人に1人の母親が亡くなっています。

貧しい人々は毎日朝から晩まで働いてようやく生活ができる。家族が死んでもいつまでもめそめそしている訳にはいかない。子どもはまたつくればいい、女房はまた貰えばいいと気持ちの切り替えをするために、常日頃から女性や子どもの命や人権を軽んじておく。「女子供」という言葉には悲しい心のトレーニングの面がありました。途上国の女性や子どもたちの命、人権が軽んじられないためには、死なないことです。

日本のジョイセフというNGOが世界中に配っている、女の子と赤ちゃんの絵が描いてある赤い箱があります。小さな石鹸と1m四方のビニールシート、絵と文字でお産のやり方が書いてある紙、消毒した安全カミソリと短いたこ糸、直径2~3cmのプラスチックの板が入った小さな袋が入っています。ビニールシートの上でお産をして、プラスチック板の上でへその緒を切る。これだけの事で、感染症から赤ちゃんとお母さんの命を守る。それが女性と子どもが命を、人権を軽んじられない、ということに繋がっていきます。



男性の自殺が多いのはジェンダーの問題
日本の女性の平均寿命は世界一長く、男性も世界一だったのが、第2位になってしまいました。

実はこの社会は、男性がすごく生きづらい社会になっていません。年間の自殺者3万人が10年続いています。警視庁の自殺統計は、自殺を企てたと思われる時刻から48時間以内に亡くなった方を自殺と言い、3日目とか数週間後とかに亡くなった方は統計に入れない。全部入れると、今の3倍だそうです。毎年10万人、しかも壮年、中年の男性がすごく多い。

私はここにはジェンダーの問題があると思います。唐突ですけど、ストレス解消には泣いたり笑ったりするのが良いと言います。女性はよく泣きます。男性は泣かない分ストレスを溜め込んでいます。男性が泣かないのは日本では130年位、ヨーロッパでも200年位の事です。近代が始まって、男性は泣いてはいけない事になった。

今からでも、男性の皆さんは泣く練習をしてください。女性の方々にはお願いします。「うちのおとうちゃん、テレビのドラマ見て、メソメソするんだから」と言わないでください。お子さんやお孫さんに、「男の子でしょ」って言わないでください。

自殺遺児の方々と交流がありますけど、高校生ぐらいになると、「何でお父さん、辛いって言ってくれなかったんだろ」って自分を責めます。お父さんが「もう駄目。店、閉める」、「借金だらけでどうにも首が回らなくなった。ごめん」って言ったら、「皆で頑張っていこうよ」って言ったのに、と。

これからは、弱音を吐く男性が良い男です。今日、来てくださった男性の皆さまに長生きしていただくために、この話をして終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(まとめ 田中きょうこ)

